

第五幕

登場人物…

ハンプティ

ダンプティ

マルレーン

屋外、マルレーンの泣き声が聞こえる。

ハンプティ 「誰かが泣いてるみたいよ、ダンプティ」

ダンプティ 「本当だね、ハンプティ。まあ、よくある事だけど」

ハンプティ 「どうしたの、おちびちゃん。」

みずみず 瑞々しいお骨ほねなんか両手に抱えて」

ダンプティ 「真新しい、血も滴りそうな香りがする。倒錯的だね」

双子は既に自分達が死の側にいるため、親しみを込めて。  
涙を拭い答えるマルレーン。

マルレーン 「ハンプティ、ダンプティ。」

あのね、ロビンお兄ちゃんが死んじゃったの」

ダンプティ 「おやまあ」

ハンプティ 「あらまあ」

双子が声を揃えて相槌を打つ。

ダンプティは他人事のように素っ気なく、少し愉快げ。

ハンプティも死そのものは愉快だが、幾らか同情的に。

全体を通じてダンプティは俯瞰的、

ハンプティは共感的と性格に若干の差がある。

ハンプティ 「じゃあ、それはお兄さんのお骨なわけね」

ダンプティ 「随分小さいんだね、卵の殻かと思ったよ」

ハンプティ 「それはちよつと小さ過ぎるわ。」

せめて、粉々になったお皿の破片よ」

ダンプティ 「それはちよつと無機的過ぎるよ。」

あんな瑞々しい香りがするのは生き物だけさ」

ハンプテイ 「ううん、それもそうね」

マルレーン 「ねえ、何の話をしてるの……？」

ダンプテイ 「ごめんね、君には解らない話だね。」

ねえ、どうしてそのお骨はそんなに小さいの？」

マルレーン 「ママがお兄ちゃんを切り刻んじゃったから」

ダンプテイ 「なるほど、それではあらばら」

ハンプテイ 「バイオレンスだわ、しかもドメステイック。」

貴女のママは人喰いビーンの血族かもね」

ビーンⅡスコットランドに実在した人喰い一族。

マルレーン 「ママが悪いんじゃないの、殺したのはマルレーン。」

ママはショーコのインメツで、

お兄ちゃんをシチューにしちやっただけ。

でも、パパが知らずにそれを美味しい、

美味しいって食べちゃった」

なお、第三幕でも同様にロビンがママの言葉を引用して

『ショーコ』を『インメツ』くと言っている。

単語の使い方自体はきちんと理解していないので片言。

顔を見合わせて妙な顔をする二人。

まあいいや、とマルレーンに話を合わせる。

ダンプテイ 「……で、それが残ったお骨ってわけだ」

ハンプテイ 「可哀想ね、お兄さん」

マルレーン 「どうしたら良いのかな。」

どうすればお兄ちゃんは喜んでくれるかな」

また少し涙ぐむ、ぼそぼそと沈んだ喋り方で。

ハンプテイ 「それならまずお墓を作ったらどう？」

こんな剥き出しじゃ、きっと寒いと思うわ」

ハンプテイ、手を伸ばして骨のラインを

つつ、つつと指先でなぞるような仕草。

子供っぽさの中で少し妖しげに。

マルレーン 「そしたら、お兄ちゃんは

マルレーンを許してくれると思う？」

ダンプテイ 「さあ。」

君がお兄さんを殺した動機も経緯も知らないけど。  
そのままよりは良いんじゃないかな。

嗚呼、でも…君がお兄さんを抱いていたのなら、  
そりやもう話は別だけど」

ハンプテイ 「嗚呼、それは素敵だわ。新しい物語が始まりそうね！」  
ライム

ナーサリー・ライムのライム、韻や詩という意味。

マルレーン 「解んない、二人の言う事よく解んないよ。」

でも、お兄ちゃんにお墓がないままは可哀想。

だから、お墓を作つてあげる。

♪ ピッキングアップベリーゼム  
pick ing up berry the m  
アンダーザ コールド マーブル  
under the cold marble  
ストーンズ  
stones」

『marble stones』と聞いて

双子が眉をひそ顰めて動きを止める。

主に反応しているのはマーブルの文字。

ハンプテイ 「cold marble stones…:…？」  
コールド マーブル ストーンズ

ダンプテイ 「そういえば、そういう歌だったね。」

ねえ、僕良い事を思い付いたよハンプテイ」

二行目は小声でハンプテイにだけ囁きかける。

ハンプテイ 「あら、どんな事？」

ダンプテイ 「まあ見てて」

悪戯つぼくウインクをしてみせ、視線をマルレーンへ。

ダンプテイ 「おちびちゃん、ちよいと待った」

マルレーン 「なあに？」

マルレーンはお墓についてあれこれ考えていたところ。

ダンプテイ 「marble stones,

大理石の墓石なんて君の手には負えないだろう」

マルレーン 「何処から、どうやって持ってきたら良いのかなって。」

マルレーンもちよっと困ってた。

でも、お墓には目印がいるんでしょ？」

ハンプティ 「そうね、後でお花を供えるなら。

そうでなくても、お祈りを捧げるなら必要ね」

ダンプティ 「でもそれなら、石じゃなくても構わないよね。

例えば、そうだね。君の家には庭はある？」

マルレーン 「うん、あるよ」

ダンプティ 「そこに木は？」

マルレーン 「それもあるわ、大きな大きなネズの木が」

ダンプティ 「それなら、そのネズの木を墓標にすれば良い。

根っこのところにお兄さんのお墓を掘るんだ」

マルレーン 「そっか、それならマルレーンでもできそう！

それに、お庭の木の下なら毎日見れる。

お兄ちゃんに毎日お花をあげに行ける」

ハンプティ 「ネズの木なら、嵐が根こそぎ持っていくでも

しない限りは壊れて朽ちる事もない。

確かに名案だわ、ダンプティ」

マルレーン 「ありがと、ハンプティ、ダンプティ。

マルレーンがお兄ちゃんのお葬式挙げる。

お棺かんはないし、聖書もない。

誰も来ないし、お弔いの鐘も鳴らない。

でも、シヨベルがあつたらお墓は掘れる。

マルレーンだけでも、お祈りはできる」

微笑ましげに口許を緩めるハンプティ。

ハンプティ 「頑張っつて、おちびちゃん。

素敵なお墓ができるの良いわね」

マルレーン 「うん！ じゃあね、親切なハンプティ・ダンプティ！」

駆け去っていくマルレーンを見送り手を振る二人。

ややあつて、ハンプティがダンプティを振り返る。

ハンプティ 「ネズの木だなんて、予め定められた偶然ね」

ダンプテイ 「予定調和って言えば良いのに。

あれ、あんまりお気に召さなかった？」

本気で心配せず、くすくす笑いながらのダンプテイ。

ハンプテイ 「そんな事ないわ。もう大よその筋書きは判った。

貴方は『あの歌』を呼び込もうとしてるのね。

そのために仮面のグリムの魔法を借りた」

ハンプテイもこの先の展開を見通して愉しげに笑う。

ダンプテイ 「上手くいくかな？」

ハンプテイ 「さあ、『神のみぞ知る』かしら。

ねえ、ダンプテイ。貴方、彼が動くと思ってるの？」

問いに対するダンプテイの答えは『判らない』。

明言を避けて面倒臭そうに希望的観測を述べる。

ダンプテイ 「…：訳知りオウルは動きそうにないからね。

そしたら彼以外に動ける奴はいそうにないでしょ」

ハンプテイ 「そうね、私も心当たりはないわ」

空を見上げる二人。

ハンプテイ 「退屈な世界。貴方もそう思ってるでしょ、レン？」

### 解説…

西洋文化をベースにしているため、基本は土葬。

冒頭で双子がマルレーンの抱えている骨に対して

奇妙な反応を見せたのも理由は同じ。

ちゃんと土葬されたなら骨を持っているはずもなく、

掘り起こしたにしては腐敗もなく綺麗だったから。

### 監督へ…

双子のイメージに幼さと妖艶さが同居してきました。

あくまで少年少女ではあるのですが、

それが醸し出せるぎりぎりの妖しさが欲しいです。